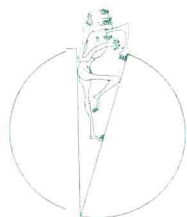
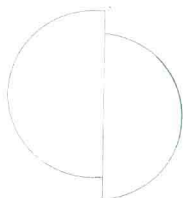
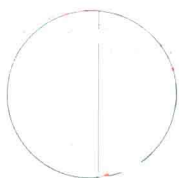
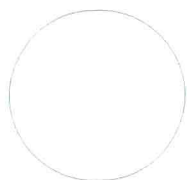


心優しき叛逆者たち

下巻

井上光晴



新潮社版

こころやさ
心優しき叛逆者たち(下巻)
はんぎやくしや

昭和四十八年 八月三十日 発行
昭和四十九年 二月二十日 五刷

定価九五〇円

著 者 井 上 光 晴
い え みつ はる

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りやう いち

発 行 所 株式 新 潮 社
かぶしき しゃんしやう しゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話〇三二六〇一二二一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

心優しき叛逆者たち（下巻）

練若四郎は下落合駅で、高田馬場行きの切符を求めた。昨晚遅く終電車がでた後、彼は同じ場所^{かんにや}に立ったのだが、田歌秀雄のアパートを訪ねての戻りだということも同じであった。ただ、今日明和荘の部屋は閉じられており、郵便受の前にボールペンで記された小さい紙片が鋏で止められていた。

「綾川君予定変更。七時迄には帰るつもりだ。多少遅くなっても待っていてくれ給え」

彼はホームのベンチに腰を掛けたが、心はずっと田歌秀雄が記した紙片の文字を追いつづけていた。綾川君予定変更と書かれている以上、二人の間に何かの打合わせがあったに違いないが、多少遅くなっても待っていてくれ給え、という文句から推測すると、昨日一緒にいた青年は、部屋の合鍵まで持っているのか。そうでなければ、「待っていてくれ」とは記せなからう。あれから今朝方まで二人は同じ部屋で過したに違いないが、それにしても合鍵まで渡す関係は何処から生れたのか。

折りから停車した西武新宿行きの電車に乗ると、練若四郎は吊革を振りながら何も考えまいとした。すべてに訣別。田歌秀雄も鶴野炭鉦の川野辺厚とも。不意に浮かび上がった内面の映像に

抵抗しようとして、彼は吊革を持ち替え、それからゆっくりとしたわざとらしい動作で網棚に突込まれたグラフ雑誌を手を取った。

「主人は食物に好き嫌いがなくて、新米主婦は、大助かりですが、うっかりすると私の料理はレストラン風になりやすいので心配です。早くわが家の名コックになりたいと思っています。」

実家の母にも電話で問合わせたりして夕食の献立をあれこれ考えますが、父までが「うまいっただか？」と心配して電話をかけてきます。

主人も私も、どちらかといえば肉食が好きなので、コレステロールとやらが多くなつては、なるべく生野菜をたくさん食べてもらうようにしています。

主人は、たいへんな「おかず食い」というのでしょうか、ご飯よりもお菜を楽しむ方なので、私のレパートリーもやがて種切れになるのではないかと心配しています。

なんといっても役者は精神、肉体ともにはげしい労働者ですからエネルギーになる食事づくりに一生懸命です。

まだ結婚間もないせい、主人はおいしい、おいしいと喜んでくれますが、そのうち叱られるようになるかもしれません。

お料理だけでなく、すべての意味で、主人の疲れをいやすことができる楽しいわが家にしたいと思っています。

彼はグラフ雑誌を網棚に戻すと、視線を電車の窓越しに小さい工場らしい建物に移した。屋根に上って踊るような仕種しぐさをしている男は修理でもしているのか。見定める間もなく電車は走り過ぎてしまい、高田馬場駅の構内に入る手前で、かなり長く停止した。

乗客が停止時間をようやく気にし始めた頃、電車は動きだし、彼は駅のホームに降りた。すべ

てに訣別。彼はもう一度口の中で小さく呟き、それから戸塚の方に向って歩きだした。

川野辺厚の事件で、検事は法廷に二人の証人を呼んだが、彼自身顔見知りでもある前坑夫たちの証言は啞然とするような内容であった。

検事 あなたが最初に、川野辺厚から被告について、練若四郎についてですね、話をしたのは何時ですか。

証人 ええと……最初といってもいろいろだったもんだから……

検事 最初といってもおぼえていない。それ程何時も、何回となく川野辺厚とは被告のことを話し合っていた。そういうことですね。

証人 はい。

検事 川野辺厚はなぜ、そんなふうに、たびたび被告のことをあなたに話したのでしょうか。

証人 それは、川野辺君がその、練若という人を憎んでいたからだと思います。

検事 憎んでいた。それはどうしてわかりましたでしょうか。川野辺厚はですね、あなたにどんなふうに話しましたか。

証人 練若は何時も自分を馬鹿にする。都会風な理屈をべらべら喋るが本当の気持は炭鉱のことなんか何も考えとらん。あいつはただおれ達の苦しみを見物にきたただけだ。そんなふうにとりました。それから……

検事 それから何といったんですか。つづけて下さい。

証人 どうせ闘争をやるならとことんまでやらねば駄目だ。鶴野炭鉱の社長の腹をぶすつと突刺す位にやらねばいかん。……そんなふうな具合だったとです。ええと、それから……

検事 ちょっと待って下さい。その、鶴野炭鉱の社長の腹をぶすつと突刺す位やらねばいかん、

というのは誰がいったのですか。

証人 それは練若さんがいうたことです。

検事 被告がそんなふうにいっただのを、川野辺厚がきいたわけですね。

証人 はい。

検事 そのところをはっきりして下さい。あなたのようにいわれると、川野辺厚がいったふうに誤解されますから。……それで、被告からそのような言葉をきいたとあなたに話してから、川野辺はあなたに何を話したのですか。

証人 言葉だけだって、そういうたんです。あいつはおれ達を咬^{そりか}して自分は何もやらんつもりだ。ひょっとしたら……

検事 ひょっとしたら、何ですか。つづけて。

証人 ひょっとしたら会社^{会社}の廻し者じゃないか。そういうとりました。

置き去りにされた子供用の三輪車に危く躓きそうになりながら、練若四郎はそれをまたいだ。どうしてそんな証言をする気になったのか。すでに四十歳も半ばに達している坑夫たちの言葉は、まったく彼の身に覚えのないことだった。彼は川野辺厚を馬鹿にしたことはなかったし、社長の腹をぶすつと突刺す位やらねばいかん、などと唆^そしもしないのだ。ひょっとしたら会社の廻し者じゃないか、という思わぬ証言については、検事も効果をはかりかねたらしく、その部分を曖昧にしたまま飛ばしてしまったが、もうひとりの男の証言は、それこそ全部が作り話の虚偽だといってもよかった。

検事 その時、あなたは被告が川野辺に向って、そんなにいうことをきかなければ殺すぞ、という声をきいたのですね。

証人 はい、きいたとです。

検事 ほかに何かききましたか。

証人 ぶち殺すぞ、とか、お前みたいな者は屑だとか、そんなふうなことです。

検事 川野辺厚は何と聞いていたでしょうか。

証人 彼のいうことはあまりよくききとれんやっただです。練若さんのいうことは信じられない。そんなふうなことだったと思います。

検事 その時、被告は何か手に持っていましたか。

証人 わかりません。

検事 わからないというのは。持っているかどうかわからないということですね。

証人 はい。わたしは練若さんのいる納屋の外できいとったから、もう薄暗かったし、声だけしかきこえなかったんです。

検事 薄暗かったから、その時被告は何を持っていたかわからない。そういうんですね。

証人 はい。

検事 サイダー瓶のような音はしなかったでしょうか。

証人 よくわかりません。……したかもしれないけど……

検事 物音はしましたか。倒れる音とかそんなふうな音ですよ。

証人 きこえたように思います。……よくわかりません。

検事 あなたはそんなふうな争いを……川野辺厚と被告との喧嘩を何度も見たのですね。

証人 二度です。二回でした。

検事 二回とも同じような状態だったのですか。

証人は。

検事 川野辺と被告が喧嘩をしていた時の様子ですよ。二回ともそんな、さっき証人はいわれましたね。ぶち殺すぞとか物の倒れる音とか、そんな様子でしたか。

証人 二回目の喧嘩はようわかりません。わたしが行った時はただワアワアやりあっとただけですから。

検事 ワアワアやりあっていた。それはつかみかかったりしたわけですか。

証人 しまったかもしれないね。わたしが見た時は止めとりましたが。

検事 証人は喧嘩の原因を知っておられるでしょうか。

証人 喧嘩の原因ですか。

検事 そうです。

証人 はつきりとは知らんですが、練若さんが川野辺君を軽蔑しとったからじゃないでしょうか。直接きいたわけじゃないですけど、みんな、そんなふうにとったから、そうじゃないからうかと思うとりました。

検事 みんながそう噂していた。被告は川野辺君を軽蔑している。そう話していたわけですね。

証人 はい。

検事 被告はなぜ川野辺君を軽蔑していたのでしょうか。

証人 それは……川野辺君は盲だったし、それに川野辺君は東京から遊びにきた学生をあまり好いと思ったらやっただけでした。

検事 被告は軽蔑していた。それで川野辺は好きになれなかった。そうですね。

練若四郎は寝具屋の横から道路を横断しようとした。向う側の古書店に立寄ろうと思ったから

だ。それにしても、始めから終りまで、それこそ見事というほかない出鱈目の証言をつづけた坑夫たちの真意は一体何だったのか。自分たちの仲間である盲目の少年を防衛しようとする気持はそれなりに理解できるが、それだけではとてもああまで嘘で塗り固めるのは不可能なはずなのだ。むろん、彼等は生真面目な顔をして法廷で宣誓し、虚偽の証言をすれば罰せられると告げられてもいる。しかも二人とも口裏をあわせて、全くの作り話をでっち上げ通したのである。なお解せぬことは、というより、不気味にさえ思えたのは、川野辺厚自身が肯定し、それらの証言の裏付けをする「事実と時間」を細かに申し立てたという、検事側の主張であった。

彼は古書店に入り、政治、経済と書かれた棚の前に立ったが、心はそこになかった。突放そうとすればするほど、部屋の合鍵まで渡している田歌秀雄と青年の関係に向う苛だたいような気持を抑えつけることができないのだ。

「御厨の奴、随分派手なことやりやがったもんだよな」

「助かったんですか、それで」

「わからないんだな、それが。電話かけてきた奴がまたとぼけた野郎でね、救急車、救急車って、そればかりがなり立ててやがんの。救急車がどうしたっていうと、やっと御厨が睡眠薬自殺に失敗して運ばれたというんだから、まったく始末も何もありませんんだ」

「でも、失敗するというなら、助かったんじゃないかな」

「わからないらしいよ。睡眠薬自殺はね、意識を回復するまで危いっていうからね。それっきりわからないんだ。病院に行こうと思っただけで、それもわからないんだから」

「いい人だったけどね。よく読んでいたし……」

「自己流にね。弱いよ、まったく」

親子程も年の違ふ主人に対して横柄な口のきき方をする学生らしい男の背後から、練若四郎は一冊の薄い理論雑誌を差出して値段を問うた。

25

利根川河口の薄くけぶるような夕暮れの気配を通して、対岸の明りはひとつふたつと灯った。李陣春子はもう三十分程も前から銚子港の岸壁に佇んでいたが、突然、女たちの甲高い笑い声が間近に起った。彼女の眼下には幾十台ものオートバイや自転車置き並べられており、それはそのまま現在出港している漁船で働く男たちの数のあらかたを示していた。

河原愛と過した年月の一切のことを抹消してしまうのだ。今日の午後、新宿で偶然発車間際の銚子行きに乗ったのは、河原愛と出会う以前の時間自分をおきたいという気持に、ふっと誘われたからである。養父の李陣正夫はあまり商売にならぬ時期にさえ、彼女を連れてよくこの港町にきたが、醬油と魚の匂いの入りまじった空気がよほど気に入っていたのだろう。

あれは何年前だったか、今と同じような夕暮れの中を、養父と二人で工事中の岸壁をそぞろ歩きしていた時、悪酔いした老人にからまれたことがあった。抱えている四合瓶の酒を飲めといってきかなかったのである。そして李陣正夫がそれを受けると、白い不精髭を顔中に生やした老人は、朋輩の名前ででもあるのか、宮田の野郎、あの野郎ふざけやがってと繰返しながら、口汚ない言葉をたてつづけに吐きだしたのだった。

鈍いエンジンの響きがきこえてきた途端、「あ、帰ってきた」という声が上がった。李陣春子がびっくりして声の方を向くと、二つの人影が動き、見定めるとエプロンを着た女が幼児の手を

引いていた。彼女は一旦そちらに向いた足を止め、近づいてくるエンジンの音と擦違いの方向に歩きだした。町の明りはだんだんと光を増し、遭難者の碑のむこうにひろがる海面はすっかり暗くなってしまうた。

彼女は一段低くなったコンクリートの片隅に腰を下ろした。左門長兵衛に黙ったままあの家を去ってきたことへの淡い後悔、ともすれば浮かび上がろうとする河原愛の歪んだ口許を振払いながら、李陣春子は懸命に気持の中の時間をほかに移した。

小学校に上がるか上がらない頃から、陣父ちゃんにしょっちゅうきかされていた実話とも作り話ともつかぬ物語のひとつに、「つんぼになった見習工」というのがあった。

大阪の、今も流れている運河の傍に清田製鋼所という工場があったんだ。近くに歯磨きを作る工場があって、その煙突から流れる匂いがとてもうまいんだな。うまいというより、何というか清々しくて、それを嗅いでいると何時も歯を磨いた後みたいな気分になった。ところがそれは通りすがりの人や、慣れないうちだけで、だんだん慣れてくると、歯磨きの匂いが鼻について、うまいはずのご飯やお菜がそのままの気分では食べられなくなるんだな。胃袋のあたりに歯ぐきの痒でもたまつとるような気持だって、友達がいっていた。

話が横道にそれたが、そういう場所にこれから話す見習工の働く工場があったんだ。さっきいった清田製鋼所というのがそれだが、そこに東北から働きにきた見習工の降旗こうはたという十六になる少年がいた。十六だから、小学校の高等科を終えるとすぐ大阪に出てきたのだろう。

降旗という名前は珍らしいが、東北の何処かの部落には、村中、降旗というような所があるんだよ。ところが、名前の珍らしいのがたたって、職工仲間から降旗見習工はドンバタ、ドンバタと呼ばれた。動きが鈍いことも別になかったんだが、東北弁のアクセントから何となくそんなふ

うにつけられてしまったんだな。無口なのがもうひとつ災いしたのかもしれない。

ちょうど太平洋戦争の始まる直前で、工場全体が殺氣立っていた。清田製鋼所は戦車のキャタピラとか部分品を作っていたんだ。もうひとつ別に大きな工場があって、その下請けをやっていたんで、本工場よりかえって空気が荒っぽかったかもしれない。

そんなふうな空気の中で、降旗見習工は電気炉を扱う職工たちから無茶苦茶にからかわれたりしごかれたりした。降旗見習工は特殊鋼を作る電気炉に配属されていたんだよ。その電気炉には本工、見習工を入れて十人余りの労働者が配属されていたんだが、その中の本工にひとり、降旗見習工にはろくに口もきかぬが、他の職工たちのようにからかいも馴（な）れもしない男がいた。平良（たけら）という沖縄出身の職工だった。どうしてこの男のことを持出すかというと、今もいったように、ほかの者がみんなわざと降旗見習工に並みのドリルでは削れもしない硬い鋼のサンプルを渡して削ってこいといったり、ずうずう弁を真似してからかったりしている時に、この男だけが仲間に入らなかったんだ。別に見習工をかばうというのでもないんだが、とにかくむつつりしているんだな。

そうしたある日、この男が……沖縄出身の平良というむつつりした本工が巻煙草をだして、降旗見習工に火をつけてこいと命じたんだ。煙草の火をつけてこいといわれることはしょっちゅうだったから、とりわけ変わったことでも何でもなかったんだが、どういうわけかその時、爆発するような笑い声起きた。平良という職工が珍らしく降旗見習工にそんな用事をいつけたのにあつたのか、それとも別の原因があつたのか、ともかく職工たちの笑い声は平良という本工と見習工のまわりを包んだ。

事件はここから起るんだが、降旗見習工が火をつけてきた煙草を受取った瞬間、平良という本

工の顔色がみるみるうちに変わったんだ。彼はその煙草を降旗見習工の鼻先につきつけると、低い声で、これはどういうわけかときいた。みると巻煙草が真中から折れ曲っているんだな。降旗見習工は黙って頭を下げた。わざとやったんじゃないが、笑われたのがあんまり口惜しかったので煙草を握りしめた手に力が入りすぎたのかもしれない。とにかく現実には煙草は折れているんだ。ほかの職工たちはおもしろがって、どうした、どうしたとまわりを取巻く。すると平良という職工はやにわに折れた巻煙草を足で踏みじると、降旗見習工の横面を拳でいやというほど殴りつけたんだ。それからただ一言、沖繩になら何をしてもいいのか、といった。

降旗見習工の片方の耳はそれでつぶれたんだが、どういうわけかしばらくするともう一方の耳もきこえなくなつて、少年はつんぼになつてしまった。降旗見習工は平良という本工の出身が沖繩だというので煙草を折つたのではない。少年は自分を馬鹿にする職工たち全部に対して、それもわざとやったんじゃない、口惜しまぎれに巻煙草を握りしめた。それがたまたま平良という職工の巻煙草だったので、問題がこじれることになった。わかるか、もう少し深いところかというと、本当はほかの職工たちは平良という職工を、ただ沖繩出身というだけで馬鹿にしていたんだな。それを平良はかねがね腹にすえかねていた。そこに降旗見習工があらわれたというわけだ。職工たちがよつてたかつて、東北弁をさかにした意味はわかるだろう。沖繩だからなぜ軽蔑されないといけないのか、東北弁を使うからといって、どうしてドンバタと呼ばれなければならぬのか。春子、お前はよくおぼえておくんだよ。人間が人間を差別することがいちばん醜いんだ。朝鮮人を馬鹿にする日本人の顔をよくみていなさい。その人間の性根はきつと腐り切っている。

、河岸沿いの道路を往来する自転車車の光が何か羽のついた虫のように見える。李陣春子は左手の

中指を付根から先端まで唇でなぞるようにこすった。李陣正夫はまた酔うとよく、裁判の場面を検事や被告の声色入りで語った。時と場合によりさまざまな事件を組立てながら。

被告崔斗北、これだけ証拠が揃っていても、まだ無実だといひ張るのか、と検事がつめよる。はい、わたしは無実です。誰も殺しません、と崔斗北は答える。どういう事件かという、蘆溝橋事件が起きた年だから昭和十二年だな、その年の夏、呉の海兵団を脱走した水兵の屍体が宇部の町外れにある朝鮮人部落の物置きで発見されたんだ。物置きの隣に住んでいた崔斗北という朝鮮人が容疑者として逮捕された。ところが一度は自分がやったと自白した崔斗北は、裁判になると、あれは拷問されて自白したので、自分が殺したのではないと主張したんだ。水兵を確にかくまいはしたが、自分が殺したのではない。第一、かくまった水兵を殺す理由がない。自分は外出から戻った途端逮捕されたので、水兵がなぜ誰に殺されたのか、その辺のことはさっぱりわからない、といったんだ。水兵の名前は王子信也。蒲鉾^{かまぼこ}で有名な山口県の仙崎の出身だということだった。

検事の最終論告。

海軍一等水兵王子信也の死因は睡眠中、麻縄で絞殺。死後二十四時間を経過しております。推定死亡時刻は八月十三日の午後十一時前後。王子信也の屍体は八月十四日の午後十時五十分頃、本山義勝によって発見されているわけです。被告は八月十五日の午前零時三十分、帰宅した所を逮捕されたのですが、八月十三日午後十一時前後には確かに自宅にいた。即ち、王子信也殺しの現場にいたことはこれまでの証人が証言しております。被告は一旦自白したにもかかわらず、本法院においてそれをひるがえしておりますが、一切の情況証拠、物的証拠からみて、自白の信憑性は充分立証できます。被告、崔斗北は帝国海軍一等水兵王子信也の脱走を幫助したばかりか、